

六花



RIKIWA

8

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)

cover design Yuna Mizuno

黄色なるハンカチ胸にかざりみる
香水のかすかな背なへ目をつむる
わが耳のまだ衰へず夕河鹿
この人も誰かの子ども合歡の花
鶏に掻き出されたる大みみず
涼風は鶏のとさかへ県境
泳ぐ蛇たしかに鱗もちをれど
行水やちびし石鹼手に溶いて
梅雨明けを特たずに蟬の落ちてゐし
喜寿にしてみごもりしよと西瓜抱く
マイセンの髭そりカッブ梅雨明けぬ
夏やせをせよと出されて患者食
すいれんに包まれゐたる一つ岩
木々の間に風の生まれし蝶とんぼ

おぼえ書き団扇に書いてあふぎけり
白桃を妻は背中ですすりけり
冷酒の鎮静剤ぞ効きめあり
病院を抜け出してきし夏帽子
住吉の海はひろいなヨットの帆
緑蔭に右手使はず水を描く
あら檜に原爆の日の風吹くよ
高熱の脇に見舞の真桑瓜
粗もめん冷し豆腐に手前みそ
短夜や安定剤を小刻みに
鶏に河鹿の風の吹いてをり
涼風にとさかも立てず放し鶏
虫干しにそこいらへんを歩けとや

借景の山をけぶらす夕牡丹
一株のもろとも崩れ大牡丹
結界の竹にとびたる雨蛙
手の内の見えざる蓮の巻葉かな
蓮池の空の青さへ夏つばめ
本気とも見えず浮葉のゆうらりと
その影に山羊の入りたる鯉のぼり
げんげ田に遊び疲れし風のあり
咲ききつて刻の種なる時計草
いつしかは子に抛ることもカーネーション

門といふ門開きあり仏生会

住田千代子

大橋の下は濃きかに青葉潮

唐傘をはみ出してゐる牡丹かな

片栗の花に揺れゐる薄日かな

門といふ門開きあり仏生会

午後からは萎れはじめし花御堂

もんといふもんひらきありぶつしようえ すみだちよこ

「門戸を開く」というのは、禁止や制限をせず、交流・通商・出入りなどを自由にする。いわゆる性善説を大前提とした思想で釈尊の教えにも適う。四月八日の仏生会（灌仏会）は釈迦誕生を祝う花祭り。花で飾った御堂がつくられ、その中の誕生仏に甘茶を注ぐ（釈迦生誕時に産湯を使わせるために九つの竜が天から清浄の水を注いだとの伝説に由来）。寺院ではアマチャヅルを煮た甘い茶を振る舞う。今世界で人命軽視の問題を起している犯罪者も、みな誰かの子どもとして生まれてきたはずなのに……。亀田氏の指摘するグループシンク（集団浅慮）への一石を投じた。

雪卿集

青葉冷

松本文一郎

山に向きおーいと叫ぶ夏来たる
風に乗る三社祭の木遣歌
若葉風力増したる水車かな
樟若葉全身包む青くささ
青葉冷優待券は期限切れ

春の昼

志方章子

連翹の花の盛りや入院す
しぼらくは一人暮しよ春惜しむ
夏蕨夫入院につき買はず
髪洗ふ明日に手術を控へゐて
術前のみんな黙せる春の昼

雪卿集

昼下がり

出口

誠

ブランコの激しく動く昼下がり
葉の上に蝶の休める昼下がり
川中に少年遊ぶみどりの日
川中にボールの浮かぶみどりの日
大木の下を占めたるあやめかな

リラ冷え

升田ヤス子

乳色の湯に浸かりぬるリラの冷え
きぬさやを摘めば花がら零れけり
椽の花懸け造りより見下ろせり
寄り添ふや紫華鬢指しなから
鬼百合にズボンの染まる窯どころ

雪卿集

薔
薇

永田万年青

一輪の薔薇は垣根を越えにけり
藤房に頬撫でられて嬉しかり
紫陽花や路地を出てゆく紅の傘
カーネーション厨にそつと挿しておく
新緑の池をめぐりて深呼吸

手
毬
花

佐津のぼる

田植機の植ゑ損じたる苗の浮く
ゆがみたる枝に弾みて手毬花
夕まぐれ余花の周りの雨細き
翳りたる村家々の柿若葉
茅葺のなくなりし里花胡瓜

雪樹集

夏の子供

溝淵弘志

熊本の産地ラベルの茄子を買ふ
散髪屋夏の子供となりにけり
取り皿や川の模様に鮎乗せる
昨日より今日の暑さや庭掃除
柿の苗九十四の父買ひにけり

枯男松

赤松有馬守破天龍正義

厨には矢筈豌豆薄日さす
塾の庭南天の花咲き競ふ
薔薇の香や我もなりたし杜子春に
山藤に覆はれぬたる枯男松
盃舟ふせてありたる菱の花

蛩雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十八年七月号鑑賞

結界の竹にとびたる雨蛙 笹村 政子

結界は誰が何を持って結界としても構わない。縄で結んだ石ころ一つ置けば、主人の意志を表せる。但し互いに阿吽の呼吸が通じる場合のみ。約束事を知らなければただの石ころにしか過ぎない。そう考えるとお金も一つの結界かしらんと、つい下卑た方にいきそうだからやめる。

さてこの句は茶室の庭か神社仏閣の庭に設えられた、竹の結界で、渡してある竹から内へは入ってはいけませんよ、という標（しるし）。青竹に飛びついた雨蛙は一瞬竹の色と同化して消えたように見える。やがて咽をくくくと動かすから、雨蛙と知る。

連翹の花の盛りや入院す 志方 章子

入院というのは、どのような病気であれ、鬱々とする。手術待ちならなおさら不安が過ぎる。連翹が咲く頃は様々な花が咲き、うららかであるが、春愁も伴うころ。のんびりベッドで読書にいそむことなど考えられまい。まして作者は普段から健康がすぐれず、外出さえままならないジレンマを抱えている。この句は、おそらく病名がはつきりして、入院したのである。ある意味ではその治療次第では健康を取り戻せる。そういう不思議な安堵感さえこの句に見る。その後退院して笑顔が戻り、今では句会や吟行にも出ているのが嬉しい。

葉の上に蝶の休める昼下がり 出口 誠

蝶が葉の上で休んでいる。主観を交えず淡々と写し取った。



とは言っても、「休める」はあきらかに作者の主観で、蝶自身は「休んでないよ」というかもしれない。純粹の写生なら「蝶の留まる」になろう。写生がいかに難しいかを教えてくれる句でもある。しかし、この程度の主観なら技巧が気になると感じることはない。野球で君えば安拓て、その安打の積み重ねにホームランが生まれる。偉大なる平凡といわれた虚子は「陳腐は採らないが平凡は採る」と言っている。主宰もそうである。句でも生活でも平凡がいかに難しいことか藤沢周平も「ふつうが一番」と言った意味が分かる。

きぬさやを摘めば花から零れけり 升田ヤス子

私は「きぬさや」を作ったことがありませんで、摘んだらどんなことが起こるのか想像も付きまっせんばい。ちかごろお友達がきぬさやを採りにおいでと手紙をくれましたので、延々何時間もかけて自転車で貰いにまいりました。友がほれもう採れるよ、と指さしたのが、へっちゃんこの緑色をしたブーメランのようなものでした。サラダにしたらいよいよいつて、ほきほきとかぶちぶちとか天使の羽をもぎ取るように残酷行為をすすめるのです。こらーばちあたりなことを、と思いつながら、サラダやちらし寿司を彩るあざやかな緑を思うと涎が出てきて、食欲本能を奮い立たせるのです。きぬさやを摘むときなにやら枯れたような物が一緒にこぼれたのですがそれが花柄というものでしょうか。